シリーズ 探訪 わが町文化財 その119

日光神社遺跡出土の青銅鏡

日常生活に欠かせない道具の一つに鏡があります。日本に鏡がもたらされたのは、弥生時代前期（約2300年前）と考えられており、長い歴史があります。私たちが普段使用しているガラス鏡が一般的になったのは、板ガラスが普及した明治40年（1907年）以降とされており、鏡の長い歴史からすると比較的最近のことと言えます。

ガラス鏡が普及するまで、日本で長く使用され続けてきたのが金属で作られた鏡でした。主に銅と錫（すず）の合金である青銅製で、基本的には円形をしています。鏡面の裏（背面）にはさまざまな模様が施されており、真ん中には鈕（ちゅう）という穴の開いたつまみがあり、そこに紐（ひも）を通して持つようになっています。

「鏡が割れたり、曇ると不吉」ということが言われたりしますが、一般庶民に普及する江戸時代以前の鏡は、姿見としての実用道具ではなく、時には権威や威信を示す宝器として使用されたり、魔除けの道具であったり、神の依り代として使用されたりと、非常に特殊な存在でした。

写真の青銅鏡は、日光神社遺跡（上湯川地区）から発見された3面の内の一つで、鎌倉時代（約700年前）のものです。この鏡は和鏡（わきょう）と呼ばれるもので、平安時代以降に草花や鳥を主題とした和風の鏡として作られるようになったものです。山吹とみられる花や葉の間に、雀（すずめ）と思われる羽ばたく2羽の鳥や蝶（ちょう）があしらわれています。

この鏡は、地域交流センター（ALEC）の資料展示室で見学することができます。

日光神社遺跡出土青銅鏡の背面（直径 11.2㎝）

●〒643-0021 和歌山県有田郡有田川町下津野 2018-4
●有田川町役場企画調整課 TEL 0737 - 52 - 2111（代）
●E-mail b.kikakuzaisei@town.aridagawa.lg.jp
●ホームページ URL https://www.town.aridagawa.lg.jp